

『政治小説 出世の間道』 訳者 尺 秀三郎

上 村 直 己（熊本学園大学商学部元非常勤講師）

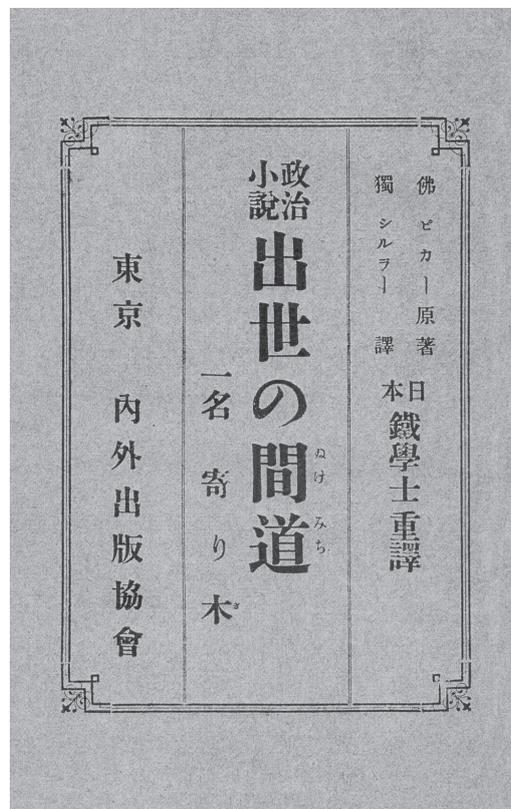
Hidesaburô Seki, der Übersetzer vom politischen Roman
Syusse no Nukemichi (*Der Parasit* v. Fr. Schiller)

Naoki KAMIMURA

序 論

(1) 『出世の間道』 出版・解題

「政治小説」という語が冠され、「一名、寄り木」という副題の付いた『出世の間道』は明治34年（1901）9月、内外出版協会（東京・神田）から刊行された。扉には仏ピカー原著、独シルラー訳、日本鐵學士重訳と書かれている。四六判、全157ページ。



これはフランスの劇作家ピカール (L.B.Picard、1769-1828) の原作『凡庸な者と卑屈な者、または立身の道』 (*Mediocre et Rampart, ou Le Moyen de parvenir*) (1797) をドイツの文豪シラー (Friedrich Schiller、1759 -1805) が *Der Parasit, oder die Kunst sein Glück zu machen. Ein Lustspiel nach dem Französischen.* (食客、或いは出世する道。フランス語作品に基づく喜劇) と題して訳したものを尺が重訳したものであった。その際シラーはピカールの名を出さなかった。「鉄学士重訳」とあるのは尺がライプツィヒ大学で哲学博士の学位を取得したのを承けて、それをもじったのである。扉の次のページには次ぎの様な口上がある、

口上

本書の原本は、もと脚本体にして、訳文も亦是に倣ふと雖も、此書の言葉を以て、直に舞台に演せんと目的に非ず、二三の郎嬢集り給ひ、相知団欒の中、共読し給ふの榮を願はんとするなり。例へば太郎君は大臣となり、お玉嬢は白妙となり、おませは美門院の役まはりとなりて、互に受持の詞書を読み、以て楽まれんことを願ふなり。(中略)

本書は、成る可く、原書の語句を省略せざるの考を以て翻訳せり。されど余りに語々の対訳を主とする時は、意に於て却て通じ難き句を生ずるが故に、これ等の場合には、務めて類似の表出方を用ひたり、又人名地名等は、原音に似よりて、我国にもあるらしき名を取り、巴里は之を東京に改めたり。されど事實は聊も加減する処なし、但握手を稽首に換ふる等、意を取りて言を採らざる、これ又訳書の常手段に倣ふ。

本書原文は、名にし負ふ、独逸の大家シルラルの名筆にて、訳書は名もなき一生の枯筆なれば、原訳両文雲泥の差あるべく、且はあたらシルラルの筆光を、抹殺せんと恐ありしが、原書一読の後、あまりに面白くて、空しく巻を措くに忍びざりしまゝ、斯くは罪を作り初めけり

巻中人物

ナルボン
Narbonne
マダム ベルモン
Md. Belmont
シャロツテ
Charlotte
セリクーア
Selicour
ラ ロッシェ
La. Rosche
フィルメン
Firmin
カール フィルメン
Karl Firmin
ミシユール
Michel

大臣	成穂 豊秋
全母	美門院
全娘	白 妙
大臣	芹倉 狡吉
	付官
吏	比留間 庄吾
庄吾倅少尉	全 歌鹿 <small>カルク</small>
成穂家来	三 尻 平内

原文は脚本体つまり戯曲なのだが、「政治戯曲」とか「政治劇」とはせず「政治小説」としたのは口上にあるように舞台で演じるためではなく、数人が読み合つて楽しんでもらうためであったが、それだけではなくこれが文芸用語として定着していることを尺は考慮したのであろう。例えば広辞苑は「政治小説」をこう定義している。「政治社会の事件などを主題とし、或いは政治思想の普及・宣伝を目的とする小説。我が国では明治10年代中頃から20年代初頭にかけて国会開設運動当時に流行」。¹⁾ これによると明治34年出版の『出世の間道』は「政治小説」の全盛期を過ぎた頃に現れた作品であったことが分かる。

(2) 構成・あらすじ・訳文

全体は4幕（序幕・二幕目・三幕目・四幕目）から成る。そして各幕は7～11切に分かれる。この切は尺の用語で普通は場（Auftritt）に当たる。四幕目の最後の切は大切（Letzter Auftritt）である。

あらすじ：成穂大臣の部下3人の官吏（書記）芹倉狡吉、原魯四郎、比留間庄吾が外国公使のポストを巡って競争する話で劇が展開する。当然一番多く登場するのもこの4人である。比留間庄吾の俸の歌鹿は、父上が能力一杯働けばどんな高い官職でも昇れないことはないでしょうに、そしたら自分も遠慮せずに成穂大臣の娘の白妙嬢に結婚の申し込みができるのという。聞くところではあなたは芹倉氏よりはるかに役に立っていて、ごますり男の芹倉は前の大臣に取り入って退職金を貪り、新大臣のお気に入りでもあります。それに対して父は、君は芹倉氏に恨みでもあるのか。人は相身互い。自分は人を出し抜いて出世しようとは思わないという。比留間は芹倉のために非職になった原魯四郎に会う。原がいうには、芹倉は成穂大臣に取り入って公使になり、白妙嬢と結婚するつもりいる。だが原は公使になるべきは比留間だという。一方成穂大臣とその母の美門院は芹倉のことが気に入りに、高く評価する。風采といい学識といい話も面白く、音楽でも絵画や詩でも知らないことないと。だが原魯四郎は、芹倉は実に根性の卑しき奴で、その無学もその根性と釣り合っているなどと大臣の前でも言い放つ。大臣は和解を勧めるが、原は聞く耳を持たない。こうして原と芹倉の対立は続いて行く。だが最後になって大臣官房から送られた草案が乱暴であったために起草者は誰かという問題が起ったとき、比留間が名乗り出た。

大臣が言った。「比留間さん、そなたがあの草案の起草者だから、其報^{むくい}勞^{ほまれ}と榮譽とは、そなたが得るのが当然だ。——そこで内閣より、そなたは公使に登庸された」（一同驚き顔を見合あす）、芹倉に向かっては「そなたも見る通り、そなたの狂言は、皆ばれてしまった。」「もうそなたは、茲^{こゝ}処^{こゝ}には用のない者だ」。芹倉はこそこそ逃げて行く。歌鹿には「父^{ててこ}御の廉正に倣ひて、清く此世を渡りたまへ、拙者も喜んで養子にいたさう。」

尺はこれが悲劇か喜劇かどうかは何も語っていないが、どちらかというとい喜劇に近い。次ぎに序幕の「一の切」のシラーの原文と尺による訳文を見てみよう。

Erster Aufzug

Erster Auftritt

Firmin, der Vater und Karl Firmin

Karl. Welch glücklicher Zufall! — Denken Sie doch, Vater!

Firmin. Was ist's?

Karl. Ich habe sie wieder gefunden

Firmin. Wen?

Karl. Charlotten. Seitdem ich in Paris bin, suchte ich sie an allen öffentlichen Plätzen vergebens—und das erste Mal, daß ich zu Ihnen aufs Bureau komme, führt mein Glücksstern sie mir entgegen.

Firmin. Aber wie denn?

Karl. Denken Sie doch nur ! Dieses herrliche Mädchen, das ich zu Colmar im Haus ihrer Tante besuchte— diese Charlotte, die ich liebe und und ewig lieben werde—sie ist die Tochter? —

Firmin.Wessen?

Karl. Ihres Principals, des neuen Ministers. — ich kannte sie immer nur unter dem Namen Charlotte.

Firmin. Sie ist die Tochter ?

Karl. Des Herrn von Narbonne.

Firmin. Und du liebst sie noch ?

序 幕 一 の 切

登場者 { ^{ひるま}比留間 庄 吾
 { 全 俣 歌 鹿

歌 何と云ふ仕合でせう！ 父上、マアお察し下さい

比 何が！ 藪から棒に！

歌 私は再び^{あのこ}彼嬢にめぐり逢ひました

比 誰れに？

歌 白妙^{しろたえ}に、東京に来て以来、人の集る場所は勿論、所々方々と尋ねましたが、皆無駄で—
—そして今日始めてあなたの詰所へお尋ね申した処、星のめぐりが善かったか、嬢に再会しました

比 併、なぜそれが仕合なのか——

歌 マアお聞き下さいまし— 彼嬢には、私が地方に居る時、嬢の叔母^{ちかづき}の内、知己になりましたが——今は忘れかぬる、イヤ生涯忘れられない、あの白妙嬢は、何の娘御でございますぜ

比 誰のサ？

歌 あなたの長官の、あの今度の大臣の——私も今迄は、只白妙とばかり聞いて、父御^{おやご}の名は知らずに居ましたが

比 さうか、長官どの、娘？

歌 ハイ成穂大臣の

比 シテ、そちは未だ慕って居るのか

本書は原文に忠実に訳しているが、人名地名などは原音に似通った、日本にもあるような名を取っており、舞台はパリを東京に改めている。またピカールの原作をシラーは短縮したり付け加えてもおり、ましてその重訳は改作ないし翻案物と呼ぶべきである。

だがドイツの文豪シラーは明治時代に文学者や思想家などをはじめかなり広くもてはやされていたが、翻訳となると少ない。その意味で重訳とはいえシラーの珍しい作品をいち早く翻訳して紹介したのは評価してよからう。恐らく尺秀三郎は約5年間のドイツ留学時代にこ

の作品に出会ったのではあるまいか。

尺秀三郎の生涯と業績

(1) 出生及び幼少時代

遠藤（尺）秀三郎は、履歴書²⁾によると文久2年（1861）4月14日、旧石岡藩の江戸藩邸において生まれた。この履歴書には幼少期のことについては記載がなく、明治12年（1879）2月に東京師範学校に入学したことから始まっている。だが『当代紳士伝』（明治42年）にはこの間の経歴を次のように記している。

聞ク君ハ文久二年三月ヲ以テ江戸小石川松平播磨守廷内ニ生ル、藩中ノ雄、曾我氏ノ家ノ人ナリ、年甫メテ七歳父ニ從テ領国常川石岡ニ到リ、藩黌ニ学ンデ神童ノ誉アリ、十歳ノ時藩地ニ開カレタル小学校ニ入り一聞十知ノ敏慧屡々人ヲ驚カシム、曾々県令中山信安氏³⁾ 属僚ヲ從ヘテ県下各学校ヲ巡回スルアリ、君ガ勤学遂ニ発見セラレ三万ノ就学児童中ヨリ拔擢セラレテ其義子トナル、爾後厳格ナル中山氏ノ教訓ヲ受ケ精神陶冶ニ資スルモノ決シテ鮮少ナラザルナリ、十四歳ニシテ東京養家ノ邸ニ入ル、先ヅ鱸松塘翁ノ七曲塾ニ入り其英才忽チニシテ先輩ヲ压倒ス、後碩学尺振八⁴⁾ 氏ノ本所共立学舎ニ入り主トシテ外国語ヲ修ム、踵イテ駿河台ノ宣教師「クーバー」氏ニ從ツテ実用英語ヲ研究ス、翌年三菱商船学校ニ入り更ニ東京師範学校ニ転学ス、…（同書133頁）



尺 秀三郎
（『大正名家列伝』大4）

幼少期の秀太郎は神童の誉れがあり、学校に入ってから勤学ぶりが目に付いたというのである。とにかく勉強好きであったようだ。

(2) 尋常小学読本の編纂

履歴書によると遠藤（尺）秀三郎は明治19年1月25日を以て学習院を「依願免助教」となり、翌日「文部省雇編輯局詰申付」となっている。そして同年5月には文部属判任官に任命された。当時の文部大臣は森有礼であり、編輯局長の伊沢修二は森の旨を受け幾多の編輯員を淘汰したが、尺は湯本武比古⁵⁾、田中登作らと共に編輯局に入り、始めて談話体を交えた読本を作成した。当時の尋常読本は全く彼らが担当、作成したものであって、一時日本全国に行われたという。

尺は後年、教科書編纂の経緯を『随感録』（大正5年、大日本図書株式会社）で以下のように語っている。

先生（伊沢修二のこと一筆者注）は文部省編輯局長になられた。そして新教科書編纂と云ふので、従来の漢文直訳体の小学読本を改訂して、談話体のものにするに熱中せられて居た。処で教育の心得もあり、こんな文も書けるなら、是非来て見ろと云うことであつた。橋渡しは湯本武彦君で、私は正否を氣遣つたが、同君も勸むるので、行く

ことにお返事をした。

「こんな文」とは尺が師範学校時代に書いた『富士の白雪』（筆者未見）という小説のことであろう。『大正名家列伝』（大正4年）所収「尺秀三郎」の項の冒頭にも次のように書かれている。

「教育界の功労者にして其著作に係る談話体を加へたる小学読本は我國民教育の普及に一生涯を開拓せるものにして実に不朽の功績といはざるべからず」

森大臣は尺の功労を多として教育制度の取り調べの名目で3年間のドイツに留学させた。

(3) ライプツィヒ大学留学

尺（遠藤）の履歴書には明治21年（1888）5月3日付けで「私費ヲ以テ独逸国ニ留学ニ付該国ニ於テ教科書取調囑託手当トシテ一年凡ソ金三百六拾円支給ス」（文部省）とある。従って『幕末明治海外渡航者総覧』（第1巻）において尺秀三郎の「渡航形態」は「公費留学、私費留学」となっている。

因に、筆者は1989年7月から3ヶ月間国際交流基金によりライプツィヒに滞在した。明治時代にライプツィヒ、イエーナ、ハレ各大学に留学した日本人に関する資料をそれぞれの大学の文書館（Archiv）において調査するのが目的だった。（当時はベルリンの壁が崩壊する直前のことで貴重な体験であったと同時に、懐かしく思い出す。その頃ライプツィヒ大学はカール・マルクス大学と称していた。）以下に述べることは、主として当時調査蒐集した資料による。

「学生カード」（Studentenkartei）には尺（遠藤）について次のように記載されている。

Endo, Hidesaburo

Geburtsort : Tokio

Staatsangehörigkeit : Japan

Geburtstag : 1862

Vater : Gutsbesitzer

Religion : Budist.

Immatri : 1.Mai 1889 No.570

Studium : Philosophie

Zeugnis ausgestellt am 28. Mai 1892

Abgegangen meldet am 3. Juni 1892 bei phil.Fall der Promotion

これで尺は1889年5月1日にライプツィヒ大学に入学手続きをしたことが分かる。学科は哲学。修了証書は1892年5月28日に発行されている。そして学位授与に際して、92年6月3日に退学している。

なお学位請求論文に添えられた彼の履歴書によると、入学前にコトブス⁶⁾においてドイツ語を1年間学んだという。

「聴講したと認められた講義題目」(Die als gehört bescheinigten Vorlesungen) と記された資料によると、彼が受講した科目と担当者教授は次の通り。

1889 年夏学期

哲学及び論理学入門 (Heinze) Einleit. in die Philosophie u. Logik
 教育学史 (Masius) Gesch. d. Pädagogik I

1889/90 年冬学期

教育学史 II — 人文主義時代の性格学 (Masius) Gesch. d. Pädagogik II — Charakteristik
 an d. Zeitalter d. Humanismus

1890 年夏学期

近世哲学史 (Wundt) Gesch. d. neueren Philosophie
 一般教育学 — 16・17 世紀の学校と学校秩序 (Masius) Allg. Erziehungslehre — S
 chulen u. Schulenordnungen d. 16. u. 17. Jahrh.

1890/91 年冬学期

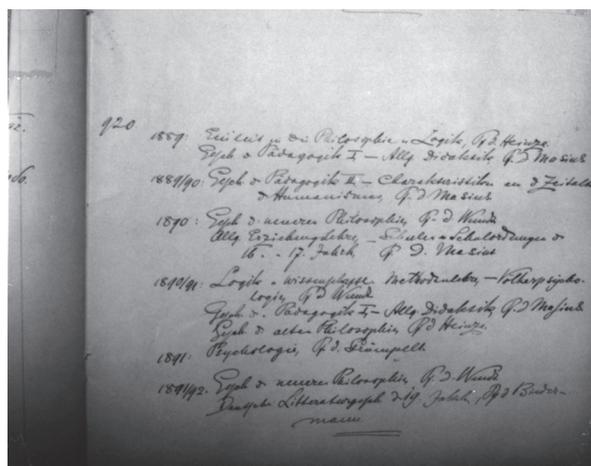
民族心理学 (Wundt) Völkerpsychologie
 教育学史 — 一般教授学 (Masius) Gesch. d. Pädagogik I — All. Didaktik
 古代哲学史 (Heinze) Gesch. d. alten Philosophie

1891 年夏学期

心理学 (Strümpell) Psychologie

1891/92 年冬学期

近世哲学史 (Wundt) Gesch. d. neueren Philosophie
 19 世紀ドイツ文学史 (Biedermann) Deutsche Literaturgesch. d. 19. Jahrh.



尺 (遠藤) 秀三郎の受講題目
 (ライプツィヒ大学文書館蔵)

教師プロフィール

Heinze, Max (1835-1909) ドイツの哲学者。はじめハレ、チュービンゲン、ベルリン各大学で神学、哲学、古典文献学を修めた。1872年ライプツィヒ大学で「ギリシャ哲学における教義と言葉」(*Die Lehre und Logos in der griechischen Philosophie*)によって大学教授資格を得た。74年正教授としてバーゼル大学、次いで75年にはハインリヒ・アーレンスの後任としてライプツィヒ大学に招聘され、亡くなるまで同大学で哲学史を教えた。

Masius, Heremann (1818-1893) ドイツの教育学者。

Wundt, Wilhelm (1832-1920) ドイツの著名な心理学者、哲学者。実験心理学の建設者。はじめ医学を学び、ハイデルベルク大学助教授(1864)。その後チューリッヒ大学哲学教授を経て1875年ライプツィヒ大学哲学教授に招聘された(1918まで)。『生理学心理学綱要』(*Grundzüge der physiologischen Psychologie*, 3Bde. 1873-74)により実験心理学を確立。世界各地からここへ来て学ぶ者が多く、心理学のメッカと称された。

Strümpell, Ludwig (1812-1899) ドイツの哲学者、教育学者。1871年以降ライプツィヒ大学正教授。心理面を重視した教育学の研究で知られる。主著『心理学的教育学』(*Psychologische Pädagogik*, 1880)。

Biedermann, Karl Friedrich (1812-1901) ドイツの歴史家、評論家。主著に文化史的研究の『18世紀のドイツ』(*Deutschland im 18. Jahrhundert*) 全4巻(1854-75)がある。

(以上は *Deutsche Biologische Enzyklopädie*, hrsg. von Walter Killy 及び Konrad Krause: *Alma mater Lipsiensis, Geschichte der Universität Leipzig von 1409 bis zur Gegenwart*. による。)

(4) ライプツィヒからの書簡

尺の『随感録』(大正5年)には留学中、ライプツィヒから出した手紙が収められている。(同書237-266頁)ここではそのうち嘉納治五郎、伊沢修二、大久保利武宛のものを紹介しよう。

嘉納治五郎宛

拝啓当地の寒気は本邦とは余程相異候へ共兼て御鍛錬の貴体には何の御障も無く益御清
榮被為入候こと、奉推候^{ことなり}儲^{さほり}

先生御発程のことは昨年中新聞にて承知仕候故湯本氏到伯の節同氏により卑声を献じ候
処同氏十一月中到来の節先生には仏都巴里に御滞留のよし承り候が過日不図伯林へ御出向
の趣友人より伝承仕候故乍遅延御左右御伺申上候当地の風土習俗等是如何御考察有候哉
小生は一昨春より昨春迄コトブスと申す田舎に参り居り候ひしが昨春より当地大学に入り
修業罷在候当大学は現時六名の日本人留学いたし居候へ共来月迄には三名程帰朝の途に
就かれ候故^{ざんせい}残生甚だ僅に相成候右の中石渡法学士は先生も定めし御知音なる可く同氏こと
は本月末或は来月首に当地を去られ候^{はじめ}

先生にも好閑を以て当地見物の為め御来遊如何に御座候哉尤も市中近郊共に別に見る可き
者も御座なく候へ共亦是索遜王国の為め一都会にて目を慰むる書籍の店舗、耳を楽ましむる
音楽の妙声は、独逸はおろか欧州中、一と挙げて二位に落ちぬと市人は自慢いたし居候故御
一遊も亦妙ならん歟と存候何れ当邦にて拝眉の快機も可有之先は御左右御伺迄呈一書候也

明治二十三年二月八日

嘉納治五郎（1860-1938）は、1891年（明24）8月13日付けで熊本の第五高等中学校の校長に就任したが、その前年に欧州へ視察旅行を行った。嘉納が丁度ベルリン滞在中だと友人から聞いて出した手紙である。目下ライプツィヒには6人の日本人留学生がいるが来月までには3人が帰国の途に就くので寂しくなる。その一人石渡法学士（俊の貴族院議員石渡敏一）のことはお聞きでしょうが、同氏は本月末か来月初旬には当地を去ります。「それで先生も暇を見つけてこちらに来られては如何ですか。当市には別に見るべきものはないが、ザクセン王国第一の都会であって書籍と音楽に於いてはドイツはおろか欧州でも一、二を競うものと市民は自慢しています。ご来遊も一興だと思います。」こう述べてライプツィヒ来遊を勧めたが、嘉納がそれに応じるとはなかった。嘉納は晩年、1936年（昭11）ベルリンオリンピックに際して開かれたIOC総会で、1940年（昭16）の東京オリンピック（後に戦争の激化のために返上）招致に成功。若き日当地に滞在したことを想起したのではあるまいか。文中の湯本は湯本武比古（1856-1925）のことで、尺と同じく東京師範学校卒で学習院教師を務め、さらに共に文部省編修局で尋常小学読本を編修した旧知の間柄であった。

伊沢修二宛

桜白棠紅の好時節

鳳栖御一統様御揃御清福之段奉欣賀候降而私儀御余光を以て無事留学罷在り候間乍憚御放念被下度候僭過般の家信により承知仕候へば

尊師には客年十二月中御不快にて佐々木病院へ御入療の趣然るに早速御全治にて御出院被遊候よし欣拵之至に奉存候猶国家教育の爲め益御健勝被遊候様奉祈居候私儀留学も星霜既に二廻然も依然たる旧蒙生にて何のでかしたることも無く赧然の至に御座候尤も本邦にて已に一通りの学問を修め候者はイザ知らず私如き浅学のもの二年や三年にて学者にならんとは固より無理なる話にて月日愈進むに従ひ益自己の不才を感じ候而已に御座候私儀も是れより少くも三年は留学仕度志望にて然らざれば是迄の修学もさのみ益なきこと、痛心仕居候然るに先年来所謂千金家の子弟にて半熟の学生渡来し千金を擲ちて寸識を買ひ意気得々たる当人等の爲めにも損益甚だ気づかはしきことに御座候併し是は決して他人の身上ならず自己頭上の青蠅と注意仕居候僭当大学春期休業も既に相過ぎ私の爲には第三学期の修学と相成候本期は Völkerpsychologie 民衆心理学 Über Goethe's Philosophie ゲーテ哲学観 Allgemeine Erziehungslehre 教育学 Schulen u. Schulordnung 学校及管理法 Geschichte der deutschen Literatur 独逸文学史 Das deutsche Drama von Lessing bis Kleist レッシングよりクライストに至る独逸演劇 Geschichte des neueren Liedes 新体詩歌歴史等聴講致度心算に御座候何にいたせ学者の巢窟たる独国中の一大学に御座候故各期面白き講義御座候殊に Wundt ヴント教授の民俗心理学は国語、習俗の変遷を哲理に照らし説明致如何にも講義に巧みなる人に御座候故に実に面白くいつも聴講者八百名位有之候（中略）例の尋常小学読本は其後の需要如何に御座候や私儀は今日に於ても満足いたし居候が帰朝の上は尚補正を加ふるの榮を得度希望仕居候本月伯林にて独逸全国の教員会御座候が参会仕度志望に御座候野尻精一氏⁷⁾は昨朝既に当地を發し、奥、瑞を経て六月下旬横浜に帰着す可き筈に御座候

先は御左右伺迄呈一翰候也 艸々敬白

廿三年四月廿一日

伊沢修二(1851-1917)は文部省編修局長を務めていた時期もあり、尺はその下で小学読本の編修に当たったので尺にとっては上司にあたり、恩人の一人である。尊師と呼んでいるのはそのためである。師が病氣から回復したのを悦び、それは国家教育のために喜ばしいという。伊沢は明治21年に国家教育社を創設し、忠君愛国主義の国家教育を主張した。尺は後年その機関誌『国家教育』に寄稿している。留学報告もしている。「日本で一通りの学問を修めた人なら兎も角、自分の如き浅学のものは2年や3年で学者なろうとは無理な話で、月日が進むに従い自分の不才を感じます」という。それでも少なくとも3年は留学したい、そうでないと今まで学んだのことが無駄になるからだという。聴きたい講義を列挙しているが実際に聴講したかどうかは分からない。資料的に聴いたことが確かなのは前述の通りである。有名なヴントのVölkerpsychologie(民族心理学)については具体的に述べていて、面白かったとし、聴講者が800人ぐらいだったと書いている。自分らが編んだ尋常小学読本のその後売れ行きを訊いたり、帰国したら補正したいと述べているのは興味深い。本月ベルリンにてドイツ全国の教員会があるので参加したいと述べているが実際参加したかは不明。

大久保利武宛

謹啓^{ハレ}礼御出立^{みぎり}の砌^{らい}は御来^{はい}萊^ご有^{ばん}之^{こく}候^{ばん}処^{こく}かけ違^{ばん}ひ^{こく}拜^{ばん}晤^{こく}を得^{ばん}ず^{こく}遺^{ばん}憾^{こく}万^{ばん}斛^{こく}に奉^{ばん}存^{こく}候^{ばん}其^{ばん}節^{こく}は貴^{ばん}影^{こく}朝^{ばん}陽^{こく}子^{こく}より受^{ばん}領^{こく}奉^{ばん}敬^{こく}謝^{こく}候^{ばん}即^{ばん}ち^{こく}撮^{ばん}影^{こく}帖^{こく}に挿^{ばん}み^{こく}知^{ばん}客^{こく}に誇^{ばん}示^{こく}罷^{ばん}在^{こく}候^{ばん}又^{ばん}手^{ばん}御^{ばん}地^{こく}の御^{ばん}都^{ばん}合^{こく}は如^{ばん}何^{ばん}に被^{ばん}為^{ばん}入^{ばん}候^{ばん}哉^{ばん}貴^{ばん}友^{ばん}松^{ばん}方^{ばん}君^{ばん} ⁸⁾も御^{ばん}在^{ばん}留^{ばん}の^{ばん}故^{ばん}遇^{ばん}合^{ばん}万^{ばん}好^{ばん}御^{ばん}満^{ばん}足^{ばん}被^{ばん}遊^{ばん}候^{ばん}こと、奉^{ばん}推^{ばん}候^{ばん}殊^{ばん}に御^{ばん}地^{ばん}は地^{ばん}勢^{ばん}奇^{ばん}勝^{ばん}山^{ばん}水^{ばん}明^{ばん}媚^{ばん}夏^{ばん}日^{ばん}最^{ばん}も可^{ばん}なる^{ばん}よし承^{ばん}及^{ばん}候^{ばん}故^{ばん}萊^{ばん}府^{ばん}の^{ばん}烟^{ばん}塵^{ばん}に比^{ばん}し欣^{ばん}羨^{ばん}の^{ばん}至^{ばん}に奉^{ばん}存^{ばん}候^{ばん}若^{ばん}し孔^{ばん}方^{ばん}子^{ばん}の^{ばん}余^{ばん}綽^{ばん}と閑^{ばん}日^{ばん}月^{ばん}も御^{ばん}座^{ばん}候^{ばん}は、^{ばん}奔^{ばん}遊^{ばん}仕^{ばん}度^{ばん}とは存^{ばん}候^{ばん}へ共^{ばん}そは是^{ばん}れ^{ばん}楊^{ばん}州^{ばん}の^{ばん}夢^{ばん}なる^{ばん}可^{ばん}く^{ばん}飛^{ばん}魂^{ばん}馳^{ばん}魄^{ばん}の^{ばん}微^{ばん}意^{ばん}茲^{ばん}に鄙^{ばん}影^{ばん}を呈^{ばん}して清^{ばん}遊^{ばん}に倍^{ばん}せしめ^{ばん}度^{ばん}登^{ばん}高^{ばん}賦^{ばん}韻^{ばん}の^{ばん}日^{ばん}従^{ばん}て自^{ばん}然^{ばん}ある^{ばん}を御^{ばん}顧^{ばん}念^{ばん}被^{ばん}下^{ばん}候^{ばん}は、^{ばん}幸^{ばん}甚^{ばん}に御^{ばん}座^{ばん}候^{ばん}時^{ばん}下^{ばん}好^{ばん}春^{ばん}の^{ばん}日^{ばん}曜^{ばん}に際^{ばん}し阿^{ばん}郷^{ばん}が清^{ばん}藻^{ばん}を連^{ばん}想^{ばん}し茲^{ばん}に一^{ばん}書^{ばん}を修^{ばん}め^{ばん}て従^{ばん}来^{ばん}の^{ばん}御^{ばん}無^{ばん}音^{ばん}を謝^{ばん}し御^{ばん}左^{ばん}右^{ばん}伺^{ばん}申^{ばん}上^{ばん}候^{ばん}也 敬^{ばん}具

明治二十四年五月中旬

自 然 拜

桜花夢白き時

追伸松方君へも御序の節御鶴声願度又当地朝陽子より宜敷申出候 以上

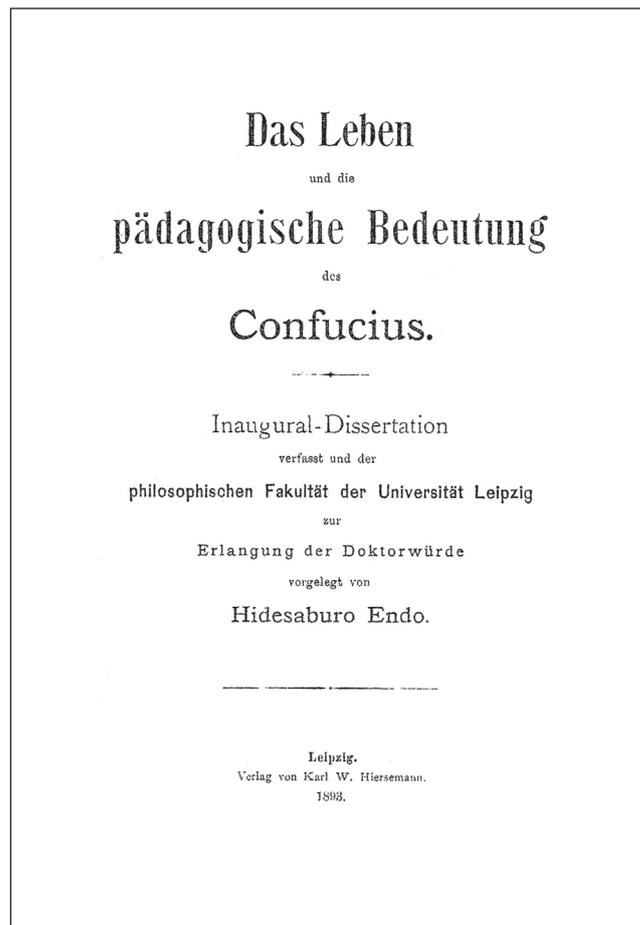
大久保利武(1865-1943)は、明治20年第一高等中学校を卒業後、米国に留学し、イエール大学を卒業。さらにドイツに留学し、ハレ大学、ハイデルベルク大学、ベルリン大学で学んだ。この手紙は、利武がハレ大学を去ってハイデルベルクへ転学するに際し近くのライプツィヒにいた尺に挨拶するために訪ねたが、行き違いにより会えなかったことを大変残念に思うという内容だ。だが朝陽子を通じて貰った貴殿の写真は写真帳に挟んであり知人に見せては自慢にしている。ハイデルベルクには松方巖君がいて万事好都合だろう、ハイデルベルクは風光明媚の地と聞く、そこで学ぶ貴殿が羨ましい。自分も暇があれば旅行を楽しみたいが目下それは夢だとも述べている。因に、利武のハイデルベルク大学留学期間は1891年5月から同年夏学期までであった。⁹⁾ なお長陽子とは誰のことか不詳である。

大久保は明治27年(1894)帰国。日清戦争では大本営付き通訳官を務めた。その後は台湾総督秘書官、内務省監獄局長など歴任。明治33年(1900)鳥取県知事となる。以後、大分県・埼玉県の各知事を歴任、大正元年(1912)12月、大阪府知事に就任。大正6年同知事退任後、貴族院議員に任じられた。次いで同11年2月、金鶏間祇侯を仰せ付けられた。晩年は昭和6年財団法人日独文化協会会長に就任し、日独友好のために尽力した。

『随感録』には留学時代の手紙としては以上の外に、上田万年、巖谷孫三、川村純義、黒田定治などに宛てたのも見られる。

(5) 哲学博士となる

遠藤(尺)は1892年6月3日にライプツィヒ大学の哲学学部長 Kurt に学位請求論文「孔子の生涯と教育的意義」(*Das Leben und die pädagogische Bedeutung des Confucius*)を提出した。これは教育家としての孔子と、彼の教育と教授目的と方法を明らかにしたものであった。



学位論文 (ライプツィヒ大学、1893)

論文の目次 (Inhaltsübersicht) は次の通り。

Inhaltsübersicht		Seite
I. Einleitung		1
II. Leben des Confucius		5
III. Die pädagogische Bedeutung		23
a) Warum ist Confucius ein Pädagog zu nennen ?		23
b) Pädagogisches Prinzip		33
1. Moralische Erziehung		34
2. Intellektuelle Erziehung		36
3. Körperliche Erziehung		36
4. Mädchen- Erziehung		37
c) Methode und Unterrichtsfächer		38
1. Erziehungsmethode		39
2. Unterrichtsmethode		43
3. Unterrichtsfächer und ihre Ziele		45
IV. Schluss		49

論文には次のような履歴書 (Lebenslauf) が添えられている。

Ich, Hidesabuo Endo, wurde geboren am 15. April 1862 in Tokio, meine Religion ist die buddhaistische ; bis zu meinen 14. Lebensjahre erhielt ich Unterricht in höheren Elementarschule, erlernte dann 2 Jahre lang privatim die chinesische Litteratur, dann ebenso 2 Jahre lang die englische Sprache, hierauf bildete ich mich 1 Jahr lang auf einer staatlichen Handelsschule aus und trat dann in das Kaiserliche Höhere Seminar ein, welches ich in Februar 1880 mit dem Zeugnis der Reife verliess.

Vom Februar 1885 bis Januar 1887 war ich als Lehrer an der Kaiserlichen Schule für Adelige angestellt. In dieser Zeit verfasste ich ein japanisches Aufsatzbuch in 16 Heften. — Von Januar 1887 bis Mai 1888 war ich im Unterrichtsministerium angestellt und beschäftigte mich mit Schulbücher- Angelegenheiten ; ich verfasste Lesebücher für Elementarschulen. — Im Mai 1888 erhielt ich die Erlaubnis, mich zu meiner weiteren Ausbildung nach Deutschland zu begeben mit der besonderen Instruktion, die Schulbücher-Verhältnisse in Deutschland kennen zu lernen.

Hier, in Deutschland, lernte ich zuerst 1 Jahr in Cottbus die deutsche Sprache und liess mich hierauf Ostern 1889 an der Universität Leipzig in der philosophischen Fakultät immatrikulieren und habe mich bis jetzt pädagogischen, philosophischen und litterarischen Studien gewidmet.

Leipzig, den 3. Juni 1892.

(訳文： 私、遠藤秀三郎は1862年4月15日東京で生まれました。宗教は仏教です。14歳まで高等小学校で授業を受け、それから2年間私塾で漢文を学び、その後同じく2年間英語を学び、次いで1年公立の商業学校で教育を受け、そして高等学校に入学し、1885年2月そこを修了しました。

1885年2月から1887年1月まで学習院の教師に雇われました。この時代に12分冊から成る1冊の日本語の作文集を作成しました。1887年1月から1888年5月まで文部省に勤務し教科書編纂の担当係となり、小学読本を編纂しました。1888年5月私は、ドイツの教科書事情を調査するという特別な使命を帯びて、ドイツに留学する許可を受けました。

ここドイツで最初1年コトブスでドイツ語を勉強し、その後1889年の復活祭に、ライプツィヒ大学の哲学学部に入學し、現在まで教育学、哲学及び文学の勉強に専念しています。

ライプツィヒ、1892年6月3日

この履歴書には文科省保存の履歴書とは異なる部分もあるが、それは尺(遠藤)が記憶にたよって書いたためであろう。留学中のことではありやむを得なかったであろう。だが大筋において両者は同じであって敢えて問題にする必要はないと思う。

学位請求論文の審査員はMasius, Heinze 両教授であった。92年8月7日にはHildebrandt, Heinze, Masius 3氏による口述試験が行われた。審査の結果合格と判定され、92年9月に哲学博士を授与された。

尺のドイツ留学で目立つのは留学した大学がライプツィヒ大学だけであったことだ。これはやゝ異例だ。ドイツの大学は周知のように学期毎に学生は転学することが可能であり、日本からの留学生も複数の大学に留学するのが多かったからだ。尺は哲学博士もやはりライプツィヒ大学で取得している。近くのGrimmaを学校視察に訪れた程度で休暇にドイツ国内を観光旅行して廻るといったこともなかったようだ。学位論文の執筆に追われ、そうした余裕はなかったとも考えられる。

(6) 英学者尺振八家の後継者となる

明治維新期の英学者で共立学舎の創設者であった尺振八(1839-1886)が明治19年(1886)12月29日に療養先の熱海で死去した。同25年(1892)11月7日に開かれた7回忌に当たって、終生の友であった乙骨太郎乙ら関係者が相談し、尺振八の晩年の弟子でドイツで博士号を取得した遠藤秀三郎を後継者とすることに決定し、公表された。それは留学中の遠藤に伝えられ、それに同意した遠藤は以後尺家を継ぐことになり、尺秀三郎と名乗るようになった。

なお、尺振八の生涯と業績については尺 次郎著『英学の先達 尺振八』(私家版、1996)に詳しい。

(7) 万国教育大会

履歴書によると尺は帰国の途中1893年(明治26)7月、米国シカゴにおいて開催された万国教育大会に列席した。これには伊沢修二の「国家教育社」からの出席の依頼があったことが次の資料によって分かる。つまり明治26年5月号『国家教育』(第13号)の「特別広

告」欄に次の記載が見られる。

追 告 国家教育社

本社員遠藤秀三郎君ハ数年間独乙国ニ留学シ同国萊府大学ニ於テ哲学科を卒業シ既ニ帰朝ノ途ニ就ケリ依テ同氏ニ本社ヲ代表シテ閣龍^{シカゴ}世界博覧会万国教育会議ニ列席セラレニコトヲ囑託シ其承諾ヲ得タリ此段社員諸君ニ稟告ス

尺は教育大会に列席したのみならず、急遽教育上の演説を行った。これに関して同年9月号『国家教育』の「学会記事」欄に「○万国教育会派出員尺秀三郎氏報告」が掲載されている。

「物ならじ、人なりけり not things, but mens.」とは、亜米利加の合衆国なる、万国博覧会を機として、ミシガン湖畔の美術館裏に、万国学会を開きし意なり。人を教へ人を育つる、我が学いかで之に漏れんや、五月より十月に至る六月の間に打ち開く可き、十有九会の其一として、教育に関せし諸会は、七月十七日より、全廿八日に至る、旬又一の開会なりき。而して初日より廿五日の、午前に至る迄の諸会は、単に教育会と称し、廿五日の午後よりして、廿八日に至るの会を万国教育会とは名のれり。其詳細は磯野君が、訳し玉ひし手続書にて、明なれば茲に略し、予は唯我社長よりの、命を畏こみ、国家教育社派遣員として、臨会せし模様を述ぶべし。予が野ねぎ生ふシカゴ市に至るや、先づ手島精一君を問うて、久闊怠慢の罪を謝しつ、兼ねて教育会云々のことを以てす、先生の曰く、「予は万国学会長、ポンニー氏の招きを受け、一たび教育会に臨みて、演説せんことを需めらるゝ切なり、されど本職に暇なくして、到底之を果たすを得ず、君等の来る誠によし（予は旧友にて在龍動なりし黒田定治氏と同行せり）宜く代りて責めを塞げ」と。予等唯会長への紹介を請ひ、演説云々を耳にせず、次日（七月廿一日）始めて臨会し、先づ会長ポンニー氏に面す、氏予等を歓迎し、与ふるに特別券を以てし、且演説をも依嘱さる、予等敢て確答せず、氏書記を呼び予等の案内を命ず、予等会規に従ひ、事務室に至り、各自の姓名資格を記し、之より随意諸部会に列するの権を得たり、(中略) 予は止を得ず英語国にて、独語の演説をなすに決すイトン君（普通教育部会長、前米国文部長官たりし人）予を延ひて、先づ檀上の椅子に倚らしむ、予私に列座の人を見るに、孰も白髭の老先生ならざれば、胡麻塩髭の熟年家なり（此等の人は、皆本日演説をせんとて、檀上に列座するなり）予自ら其形のあをにさいなるに恥ぢ、学も識もかくあらんに、演説杯受け引きしは、人もなげなる嗚呼業なりきと、思はず席を譲り譲りて、最末席に着座せしが、猶居たゝまれぬ心地しけり。聽て己が順も来りければ、英語もて短き前置き云ひつ独語にて主意を述べけり。(後略)

これによると尺は国家教育社の伊沢修二の命でシカゴの万国教育会に出席したが、主催者側から演説を求められ、友人の手島精一¹⁰⁾ や黒田定治¹¹⁾ が固辞するので自分が引き受けることになった事情や、自分の様な浅学の青二才が他の老練な演者に混じって演説する恥ずかしさや、順番を待つ間の不安が語られていて興味深い。ここには演説の内容について触れら

れていないが、『当代紳士伝』（明治42年）には「シカゴ万博博覧会附属万国教育大会ニ臨ンデ東洋哲学者ノ教育思想ニ就テ一場ノ演説ヲ試ム、」（同書134頁）とある。学位論文で取り上げた孔子の教育思想の一端を語ったのではるまいか。

(8) 帰朝後の活動——ドイツの文学事情（談）

帰朝後の尺秀三郎は留学時代の体験等を講習会を語るが多かったようだが¹²⁾、第一次『早稲田文学』（明治30年11月号）の「文学局外観」ではドイツの文学事情を具に語っている。「文学局外観」欄は文学を専門としない人が文学をどう見ているかということを知るために設けられたのであった。そこでドイツの教育事情を研究して帰国した尺秀三郎は、求めに応じて見てきたままにドイツの家庭の文学趣味をいろいろ語ったのである。

私は教育の事をしらべに欧州に行たのですが、家庭の事は非常に教育に関係するものですから、色々観察しましたが、中にも欧米の家庭の人たちは文学趣味に富るといふ事、一寸したまア母親や娘でも、いつでも大抵の話の骨となる事柄が、多く所謂大家と称する所のまア小説の話が出るですな、たとへば独乙でいって見ますれば、ゲーテとかシラとかレッシングとかいふ人、古いところではホーマーの『オデッセー』、『イリアッド』などといふものは幾ど誰れも知らんものはない位で、大家の小説の話などについて、それに仲間入の出来ぬのは余程教育のないものとして排斥される気味があるですな、それですからして、ふだん為る話の中にも、度々文学大家の言ツた小説中の一寸格言といふやうなもの、そんなやうな事をチョイチョイと引き出して、丁度耶蘇の経文を引用するやうに引用するですな、これを日本にして考へて見れば、一寸『源氏物語』とか『宇津保物語』とか、此の頃にして見れば馬琴だとかいふやうな、小説の話をして、まづ婦人などには^{うけこたへ}応答のむづかしいやうな話が多いやうに思はれますね、それといふが私の考へでは、つまり日本の小説、文学家などの書いたもの、中に、そのなんですね、金言とか格言とかいふやうなものは多く古人の言葉を引き来るやうなものに過ぎないで、文学家自身の力で後世に伝はふるに足る格言のやふなものは乏しい、即ち文学家自身の言葉が後世に伝はる格言となることは甚だ少いやうに思はれる、まして今日の小説などは、私しは余り多くは見ませんが、中々格言になるやうな言葉を作る事の出来るどころか、却て其の小説は卑陋な考に導びくやうなものが多いかと思はれる。だからして、此等の小説を読むことは其の人の為になるといふよりもむしろ害になる事が多いといつてよい程ですな、随ツて、家庭の主権者たちも多く子供達に小説を読ませぬといふ傾に自然なるからして、つまり文学の趣味に乏しいといふことになって来^{くる}のだらうと思ふ。尤も欧州あたりでも、仏蘭西のゾラの小説などは内証で娘達に研究されるものだからして、新作などのまだ筋のよく知れない小説を読ませるのは父兄が好まんやうであるけれども、クラシカ即ち文学家の作った小説は、幾ど交際場裏に必要な智識として研究することを奨励してゐる、たゞよく、我々が見ることであるが、十六七からして二十位の娘が、友達同士 Kaffee Abend など名けて寄り合ふことがあるが、それらの寄合などでは、大抵音楽や文学家の小説を研究することを主として居る。で、女でさへ此んな有様であるから、男子は勿論の事である。また大学の教授などでよく其の町の通俗な演説会などへ招かれていろんな話をするのがあ

るが、文科大学の教授が招かれて演説する時は、常に傍聴者が一番多いといふことは事実である。而して其の演説にはゲーテの『ファウスト』の批評だとか、或は『ファウスト』の哲理だとかいふやうな随分高尚な考を話すけれども、それらの事が傍聴者に面白味を与へるとすれば、傍聴者は余程文学趣味に富であるものと思はれる、それからまた何処の家庭に行き見ても、まづ内の飾として飾られたるものは、最も美しく釘装されたる文学書である。たとへば König の独逸文学史¹³⁾などは、余程立派に出来てゐる。大へん貴い本であるけれどもですね、随分広く人が持つてゐる。此の本などは科学的の価値は少ないが、大へんに古い人の文学的断片だとか、大家の自筆の原稿、書翰、肖像だとかといふやうなものを蒐めて、素人向きに大へん面白く出来てゐる。かく素人向きに文学者が骨折りて浩瀚な歴史などを編纂するといふ事は、つまり文学趣味の普く波及されてゐるのが解る証拠だ。大抵な労力では出来ない。それからシラーやゲーテやですね。其の他の大家の書物などは矢張非常に立派に表装し印刷されてある。それからまた是れと同時に、此んな貴い美本^{たか}を買ふことの出来ない人には、極廉い出版で此等文学大家の諸作を集める事の方法を立て居る、たとへばこんな風に(談者『二十ペニー叢書』と題する中の一冊を出して示さる)文学大家の作を集める手段も出来てゐる、そして見るとですね、上等の処では無論貴い物を買ふが、その出来ない下等の人民にまでも、文学趣味の普及してることが知れるだらう、且つまた何ですね、芝居なども昔の文学大家の一人の芝居ばかりをやる芝居がある。レッシング芝居といふものがあってレッシング芝居ばかりやる、其の他ゲーテなどの作ばかりをやる芝居がある。此等の処に至ると、一つの芝居をたびたび繰返されることがあるけれども、その事に趣味を有つて研究してゐるものだから、見るたんびに面白い。(後略)

これは別に深い観察をしているわけではないが、ドイツ民衆一般の文学趣味の広さを座談調で見たまま感じたままを具体的に伝えた興味ある内容となっている。¹⁴⁾これも彼の留学の成果のひとつであった。

(9) 東京外国語学校教授時代

尺は履歴書によると、明治34年(1901)4月21日付で東京外国語学校教授に任命された(叙高等官5等、8級俸下賜、叙従6位)。ドイツ語科に属した。

手元にある『東京外国語学校一覽』(従明治41年至明治42年)を見ると、校長高楠順次郎、ドイツ語担当教員には教授としては尺秀三郎、山口小太郎、水野繁太郎の3人、外国人教師にはアントン・ホエルベ、講師として安楽直治、大津康、助教授としてドイツ留学中の田代光雄がいた。なお尺は幹事も兼ねていた。山口小太郎、水野繁太郎、大津康、田代光雄は当時日本を代表するドイツ語学者であった。それに比べると尺はドイツ語に堪能ではあるが、専門は教育学、教育論であつてドイツ語学者ではなかつた。尺が比較的早く東京外語を辞したのはそうしたことが原因ではあるまいか。

(10) 語学観

尺は明治39年11月号『中学世界』(博文館)に「語学研究者の注意要件」と題する論文

を発表している。文末に「文責は記者にあり」とあるので、これから外国語を学ぼうとする若い人々のために当時東京外国語学校教授であった尺が語ったのを雑誌記者が纏めたものと思われる。冒頭でこう述べている。

「凡そ語学を修めんとするものは、先づ己れが語学を修めるの資格があるかないかを考へて、然る後ち其方針を定めねばならぬ。何の学科に拘はらず、己れの性質に不適當なものを選ぶのは不利益であるのはいふまでもないが、殊に語学の如きは、其性質に適さぬ時は、殆ど成功を見ることは出来ぬ。昔からの語学者を見るに、多くは天才ともいふべきもので、幼年の時已に数ヶ国の語で話すことの出来たものさへある。」その例として3歳で自国の言葉を正しく話すのみならず、ラテン語で父と話し、乳母とはフランス語で談話できた Uaradier Philip (独人) や5歳にしてラテン語で20分の演説をすることのできた Heineich Heinicke (デンマーク人) を紹介している。このように語学は天才を要するもで、その才能のない者がこれを修めようとするのは非常に不利益である。自国の語でも話し上手と話し下手があるが、これはその人の性質によるのであって、その辺をよく考えてみるべきだ。語学を修めようとする者に必要なのは聴官の鋭敏というこであって、耳が鈍いか、疾病があるときは人の音声を聞き分けることができず、従って正しい発音をすることが難しい。また鼻が完全でなければならぬ。鼻に病気のある人は正しい発音が出来ないので語学を修める上で不利益である。発声器官に故障のある人は、語学を修めるのには不適當であることは言うまでもない。咽喉^{のど}の悪い人とか、舌のまわらない人は始めから語学に志さない方がその人のためであるとしている。そして最後に注意すべきは結局その人の品性の如何であるとして次のように述べている。

「一体語学者は、常に思想の発表を事として居るものであるから、其品性の善悪は、直ちに其言語振りに影響する。されば語学者たらんとするものは、高尚優美な品性を持たねばならぬ。少なくとも文学思想、哲学思想を持たねばならぬ。又頗る博識あることを要するので、其の語学者となるのは甚だ困難なことである。」

これを読むと尺は一種の理想主義的な語学観を持っていたようだ。彼がドイツ語の入門書や文法書を残さなかったことも、そのことと関係があるようだ。

この前後尺はほかに専門の教育に関する2著書を世に問うている。『新編実用教育学』（明治29年）と『教育の力』（同43年）である。発売所はいずれも大日本図書株式会社（東京市京橋区銀座1丁目）である。前者は題して実用教育学という。実用の二字が実に本書の特色である。古今に亘りて敢えて一家の説に偏せず先ず教育の大体から説き、その發達の状況を叙述して後、アリストテレス、カント、ヘルバルトの学説の梗概を説いたものであった。

後者には鳥田三郎、伊沢修二が序文を寄せている。教育の力を具体例を挙げて説いている。善良の教育が神童を作り、盲啞の人を啓発し、または不良の教育が子女を誤り、或いは苦しめる実例を挙げ、教育の効力の偉大なることを証明しようとしている。

(11) 読書論

ここで雑誌『成功』（第10巻1号、明治40年）掲載の「外国語学校教授 尺秀三郎君」によって彼の読書論を見てみよう。

冒頭で自分は元来多読はしないで精読を主とすると述べている。精読する書物は自ずとその意義も明瞭になって手数も掛かるので、記憶も強固になる。自分は読書するたびに著者の苦心に酬ゆるだけの考えで読むので遅い方で、その点からも多読しない。少し読んでみて読む苦勞に値しない本は成るべく読まない。文学書は暗記するまで読まないとその真味は解らない。自分は漢文では東萊博義や文章軌範の名文は大抵暗誦するまで読み、和文では徒然草や伊勢物語、さては八犬伝等の名文は繰り返し読んで面白味が解ると思う。大事なのは何のため読むのかを考えることだ。そのことをよく考えて読書しないと空々漠々として効果の少ないものとなる。読書はあたかも食味のようなもので、下らないものを無暗に読み嚙ると滋養のある善い読み物を消化する機能がなくなる。自分の読書時間は早朝から朝食時までは定まっているがその他は一定した時間はない。人間は一日に10分でも20分でもよいから読書すべきである。自分の経験では1日に一回も読書しない日は眼前のことにのみ拘泥しているようでその日は人間が小さくなるような気がする。専門の教育書で興味あるのはルソーのエミールという本で、大哲学カントが、文章が壮快でその所論が壮大で感服の余り、夜通しそれを読み通して生涯で始めてその規則正しい生活を変更したという有名な書だ。奇抜な議論で面白いのはペスタロッチの『リーナハルド・ウント・ゲルトルート』で、これらは教育家になろうとする人はぜひ読まねばならないと思う。近年の著作としてはラインの教育書は実に意義明瞭で愉快である。専門以外の文学の愛読書はシラー、日本では田舎源氏、馬琴の八犬伝、土佐日記、漢詩は真山民集、相変わらず面白いのは唐詩選。毎日読んでいるのは論語と二宮尊徳の本で、一時は手島堵庵の著作を集めたこともある。¹⁵⁾ 尊徳は実に日本の孔子と思う。最後に尺によれば、読書というものは忙しい時に読むのが面白い、キチンと時間を当てはめて読むよりは読みたいと思って読むのが面白い。

(12) 振武学校教頭・攻玉社中学及び高等学校・九段精華女学校各校長歴任

さて、尺は履歴書によると明治41年(1908)11月13日に依願免本官となり、東京外国語学校教授を辞した。そして翌12月25日に正5位に叙せられ、同月恩給年額金四百円を下賜された。東京外語を辞したのは、ドイツ語学者の道を歩むより、教育者でない教育者の道が自分の進むべき道と判断したからであろう。以後の経歴を見てもそう推察される。

その後の尺について『当代紳士伝』(明治42年)は次のように記している。「前年故アツテ同校ヲ辞シ、振武学校ノ教頭トシテ清国留学生ノ教育ニ熱心シ余力ヲ提ゲテ著述ニ従事シツ、アリ、君ノ文章ニ長セルハ世已ニ定評アリ、曾テ人ニ教ヘテ曰ク人間ノ消閑ハ読書及文章ヲ弄スルヲ以テ其法ノ得タル者トス、…」

東京振武学校は明治36年(1903)、福島安正少将の提唱により陸軍士官学校または陸軍戸山学校に入ろうとする中国(当時清国)からの留学生の準備教育を目的として設立された学校で、主に日本語教育が行われた。著名な卒業生には蒋介石(1887-1975)がいるが、彼は1908年入学なので、当時教頭であった尺の薫陶を受けた可能性がある。

大正5年(1916)4月には自伝的随筆『随感集』(大日本図書株式会社)を出版した。これには「向上鼓吹」という語が被せられおり、既に一部は引用したが、珍しいことに米国の女流教育家ヘレン・ケラー(Helen Adams Keller, 1880-1968)から尺に宛てた手紙なども見られる。二人はシカゴにおける万国教育大会で出会って以来、旧知の間柄であった。

だが尺は大正9年(1920)4月から14年(1925)3月まで攻玉社の中学校・高等学校の校長を務めた。¹³⁾ 攻玉社は大正9年4月に財団法人組織に改めた。

九段精華女学校は明治大正期の教育学者でドイツ語学者でもあった寺田勇吉(1853-1921)が明治44年(1911)創立した学校である。ただし尺が校長を務めた期間は不明である。

(13) 人となり

『当代紳士伝』(明治42年)は彼の人となりについてこう記している。

「君資性温厚、気品自ラ備ツテ侵スベカラズ、殊ニ世ノ不遇者ニ対スル同情ハ常ニ幾多ノ私財ヲ投ジテ介補シツ、アルアリ、寔ニ方今教育界ノ明星トシテ徳ヲ頌スルニ足ル。」(同書134頁)



「かくろひし宿」の尺 秀三郎
(『随感録』より)

東京外語教授の浅田栄次(英語)と尺は大の角力好きだった。その浅田が大正3年(1914)11月9日に急逝したために、尺は追悼文「浅田栄次君を憶ふ」を執筆した。その中で角力に関して次のようなエピソードを紹介している。

君角力に精しく僕亦角力を好む、君は梅ヶ谷の精緻を賞し、僕は常陸山の豪宕を愛す、一日相携へて回向院に遊び、帰途晩食を共にせんと尾張屋に憩ふ。予兼ねて楼主が梅鬚眉なるを知り、君と話の合ふ可きを期せり。楼主先づ入浴を勧む、予等衣を解くや急に一番相撲を試む、君梅を気取り僕は常陸に擬し、唯手ほどきだけ、投げっこ無しの約束なりき、然るに楼主梅、々とおだてしかば、君勢に乗じて僕を投げ出したり、僕曰く、よし、投げっこなら、更に来いと、再び又投げられたり。楼主笑ひ僕笑ひ君又大に笑ふ、乃ち湯に入り飯を喫し、角力を談じ劇を評し、歓談中夜に及びたり。¹⁷⁾

角力に関しては同じく東京外国教授でドイツ語学者の山口小太郎もこう証言している。「世に好角家多し、尺秀三郎君の如き、人も我も許したる角力通なり、然れども精緻なる客観的に批判を下して正鵠を失せざること浅田君に如かず。」¹⁸⁾

皆川三郎氏¹⁹⁾は生前筆者宛の手紙で次のように語っている。

「尺秀三郎氏は私が攻玉社中学校生徒の頃の校長であります。いつ校長になられたか知りませんが、大正14年、私達の卒業と共に退職された筈であります。私が4年生の時63才と聞きました。1年ぐらい違っているかも知れません。ドイツのライプチヒ大学卒ドクトル・オブ・フィロソヒー、元東京外語代理校長、丈は高くありませんがカッコリとした体格、貫禄は堂々たるもの、訓示はすき通った声で、むだ口はきかず、簡にしてにして要を得たもの。大震災の直後は土間に杭を打って板並べただけの教室は屋根といえばトタン一枚、寒い冬のある日戸外での訓示に『私は老齢の身で寒さが身にしみる。若い諸君と雖もさぞ寒かろうと思って校舎を廻ってみたところが、節穴を掘り開けて寒風を入れたあとが点々と見つかって私は安心した、・・・今諸君の頭をおさえるものはうすいトタン一枚だけだ。これを除けば諸君の頭は天に通じているではないか』といった調子。節穴をこじ開けて外をのぞいたいたずら坊主共はほめられたり、あてつけられで大笑いでした。手をうしろに組んでゆっくりと校庭を歩いておられた校長が今でも目に浮かびます。(後略)」

(14) 逝去

昭和9年(1934)11月8日付東京朝日新聞には次のような死亡記事が掲載された。

尺 秀三郎氏 元外国語学校々長尺秀三郎氏は風邪から急性肺炎を起し、五日午前十時半込区北山伏町二三の自宅で逝去した。行年七十三、告別式は八日午後一時から三時まで青山斎場で執行する、氏は独逸語の大家で、攻玉社中学、九段精華高等女学校等の校長であったこともある。

墓所は東京青山霊園の「1種イ4号1側」にある。墓石の正面には「尺家累代之墓」と刻まれ、裏面には「昭和四年七月 尺秀三郎建之」と書かれている。左側面には次のように記されている。(原文は縦書き)

俗名 尺 秀實 昭和四年一月一日歿
享年三十五才

正五位勲四等
フィロソフィーエードクトル 尺 秀三郎
昭和九年 十一月五日卒
享年七十三才



「尺 家累代之墓」(東京・青山霊園)
筆者撮影 (2015・12・13)

俗名 尺 梶子 昭和三十年一月十九日歿 享年八十四才
 俗名 尺 喜代子 昭和三十四年七月七日歿 享年三十一才

なお「尺家累代之墓」の左隣には「尺振八之墓」がある。

(附) 尺 (旧姓・遠藤) 秀三郎略年譜

文久2年(1862)4月14日 江戸藩邸内に生まれる(旧石岡藩)
 明治12年(1879)2月 東京師範学校入学 この間共立学舎で英語を学ぶ
 ♪ 15年(1882)2月 同校卒業
 ♪ 18年(1885)4月 任学習院助教
 ♪ 19年(1886)1月 文部省雇編輯局詰申し付けらる
 ♪ 21年(1888)5月3日 尋常小学読本編纂担当中の勤勉を認める
 同日 非職を命じらる
 同日 私費・公費にてドイツ留学に付き、同国にて教科書取り調べ嘱託
 明治22年(1889)5月 コトブスで1年間ドイツ語を学んだのち、ライプツィヒ大学入学。
 以後3年間6学期わたり教育学等を学ぶ
 ♪ 25年(1892)9月 孔子の研究によって同大学よりドクトル・フィロソフィエの学位を取得
 ♪ ♪ 11月27日 英学者尺振八の7回忌に際し尺の晩年の弟子でドイツに留学中で学位を取得した遠藤秀三郎を後継者にすることを決定
 ♪ 26年(1893)7月 シカゴにおける万国教育大会に出席し、講演。
 ♪ 26年(1893)8月 帰朝、以後尺秀三郎と称する
 ♪ 30年(1897)4月 日本社会問題研究会の評議員となる
 ♪ 31年(1898)8月 東京美術学校教授
 ♪ 32年(1899)2月 兼任文部省視学官
 ♪ 34年(1901)4月 任東京外国語学校教授
 ♪ 37年(1904)2月 校長高楠順次郎の欧州出張につき校長代理を命じらる
 ♪ 41年(1908)11月 依願免本官となり東京外国語学校教授を辞職
 その後、振武学校教頭、大日本図書編輯所長等を歴任
 大正5年(1916)4月 自伝『随感録』出版
 ♪ 9年(1920)4月、攻玉社中学校・高等学校校長に就任(大正14年3月まで)
 その後九段精華女子高等学校長を務める
 昭和9年(1934)11月5日死去、墓所 青山霊園

注

- 1) 増補改訂版『文芸用語の基礎知識』(国文学解釈と鑑賞 第44巻5号)は次のように定義している。「特定の政治的イデオロギーを普及・宣伝するために書かれた小説をさし、文学史的には明治十年代の自由民権運動を背景とした小説群をさす」とし、「類語」として周辺に翻訳・翻案小説、寓意小説などがある」と記している。
- 2) 文部省(現文部科学省)大臣官房人事課福祉班所蔵。
- 3) 中山信安(1832-1900)旧幕臣、明治期の内務官僚、茨城県令。
- 4) 尺振八(1839-1886)教育者、英学者。中浜万次郎に師事し英語を学んだ。のち乙骨太郎らと東京本所相生町に共立学舎を設立し、多くの学生を集めた。明治19年(1886)
- 5) 湯本武比古(1856-1925)教育学者。東京高等師範学校卒業後、文部省編輯局に入り、『読書(よみかき)入門』を編集。明治22年ドイツ留学。帰国後『教育時論』主幹。ヘルバルト教育学の普及に尽力し、徳性の教育を重視した。
- 6) コトブス(Cottbus):ドイツのブランデンブルク州の都市。州都ポツダムに次ぐ都市で人口約10万(2015)。ポーランドとの国境まで20km。シュプレー川沿いの工業都市で、歴史的にはラウジッツ地方の都市。
- 7) 野尻精一(1860-1932)教育学者、文部官僚。1886(明19)欧州留学。プロイセン官立ノイチュエルレ師範学校、ベルリン大学、ライプツィヒ大学に学ぶ。帰国後、長く高等師範学校教諭を務めた。
- 8) 松方巖(1862-1942)明治16年ドイツ留学。十五銀行頭取。貴族院議員。薩摩出身。ハイデルベルク大学に留学したのは、Michael Rauck: *Japanese in the German Language and Cultural Area, 1865-1914. A General Survey*(東京都立大学経済学会、1994)によると、1889年11月から92年冬学期まで。同書227頁。
- 9) 前記M. Rauckの本による。同書310頁。
- 10) 手島精一(1850-1918)明治期の教育者、文部官僚。東京教育博物館(国立科学博物館の前身)の主幹、東京工業学校(東京工業大学の前身)校長などを歴任。欧州へは岩倉使節団に通訳として随行以来、数回出張した。
- 11) 黒田定治(1863-?)明治期の教育者。明治23年に文部省留学生として欧州に留学。帰国後、東京高等学校師範学校教授となった。
- 12) 例えば『教育報知』第433号(明治27年8月4日発行)は「高津、尺両氏の長崎行」と題して次のように報じている。
「高津鋏三郎尺秀三郎両氏は長崎県夏期講習会の招聘に応じ去月廿一日を以て東都を出発せり同講習会は八月六日より同廿六日迄交親館に開く者にして…云々」
- 13) Koenig, R: *Deutsche Literaturgeschichte*, Bielefeld, 1890。同書は明治時代に日本でもドイツ文学史通史の知識を得るのに広く用いられた。
- 14) 詳しくは拙稿「『早稲田文学』(第一次)とドイツ文学—明治中期ドイツ文学移入研究ノート」(熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第10号、1983)を参照されたい。
- 15) 江戸時代の心学者で、広く市民教育に尽力した手島塔庵(1718-86)については、尺は「手島塔庵伝」(『教育報知』第501号、明治29年1月1日発行)を発表している。
- 16) 『攻玉社百年史』(昭和38年)98頁。
- 17) 『浅田栄次追懐録』(1916)271-273頁。
- 18) 同書、278頁。

19) 皆川三郎（明治 39 [1906] ～没年不詳）昭和期の英語・英文学者。東京外語英語科卒（昭 3）。明治学院 大学教授。日英交流史に関する著書がある。

（付記）本稿は平成 27 年 12 月 12 日開催の日本医科大学における日本独学史学会で口述発表した原稿に加筆して成ったものである。

本文中の引用文献の旧字体の表記に関しては、原則として現代表記に書き改めた。